

使徒の働き8章1-3節 「キリスト教会への弾圧」

1A ステパノの殺害 1a

2A エルサレムへの激しい迫害 1b

3A ステパノの死の悼み悲しみ 2

4A 熱心さによる迫害 3

本文

私たちの聖書の学びは、8章に入ります。今晚は8章1-8節と、短い箇所になりますが、取り組みます。

8章は、8章から12章までの大きな流れの部分の始まりです。それは、エルサレムとその周辺だけに留まっていた教会の働きが、ユダヤとサマリア、そして地の果てにまで向かう宣教へと発展していく、その移行期と呼んでもよいでしょう。イエスが、弟子たちに約束されたことです。「1:8しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」エルサレムから、彼らが出て行って、ユダヤとサマリアに向かう時、それは迫害によってだったというのが、これから読む内容になります。

ところが8章から12章までの大まかな流れを見ていきますと、まず迫害がエルサレムの教会に起こり、それで人々が散っていきます。初めにピリポが福音をサマリアに伝えます。それから、9章において、迫害の急先鋒であるサウル、すなわちパウロが復活のイエスに出会い、回心します。そして10章では、カイサリアにペテロが導かれ、ローマの百人隊長であるコルネリウス一家に福音を語り、彼らが聖霊のバプテスマを受けます。11章で、エルサレムにおいてペテロが、この次第を話し、エルサレムの兄弟たちが異邦人に救いをもたらしたとして、神をほめたたえます。12章で、同じカイサリアでは、ペテロを殺そうと思った、ヘロデ・アグリッパ一世が神の御使いに打たれて死にます。そして12章の最後で、ステパノの死によって散らされた人々が、遠く、アンティオキアまで行き福音を伝えますが、ついにユダヤ人でない人々にも伝え、それでアンティオキアに教会が建てられる、という流れです。

次々といろいろなことが起こりますが、それがエルサレムの教会に対する徹底的な弾圧から始まり、その弾圧者が、後に異邦人への福音宣教者になるという流れです。では、本文を見ましょう。

1A ステパノの殺害 1a

^{1a} サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。

私たちは、ここまでの話を見て、エルサレムに一つの大きな流れの変化があったことに気づかないといけません。それは、エルサレムの教会に対しては、一定の期間、比較的、迫害が止まっていたということです。イエスが死者の中からよみがえったことを宣べ伝えた使徒たちは、死者の復活を信じていないサドカイ派が主導する、サンヘドリンの場に連れて来られました。それでも、彼らは福音を宣べ伝えることをやめませんでした。サンヘドリンのパリサイ派の重鎮、ガブリエルが、これがもし神からのものであれば、反対すれば神に敵対することになると言って、それ以上、当局は強く手を出すことができなかったのです。

彼らの告発が興味深いです。「5:28 おまえたちはエルサレム中に自分たちの教えを広めてしまった。」本当に、こうやってエルサレムには、イエス様の教えがいっぱいにされていました。そして、教会の人々に対する一般の人々の目も、好意的でした。「5:12-13 さて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。皆は心を一つにしてソロモンの回廊にいた。13 ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。」このようにして、エルサレムでは、すばらしい愛の交わりがある、すぐれた共同体が、主によって形成されていたのです。

内部に問題が生じたことも見ましたね。ギリシア語を話すユダヤ人と、ヘブル語を話すユダヤ人との間の、やもめに対する配給で摩擦が起こりました。そこで使徒たちが、主からの知恵で、七人のギリシア系ユダヤ人を執事に定めたのです。ここが大きな分岐点です。

私たちは、長年、このエルサレムとユダヤ地方にいる、伝統的なヘブル系のユダヤ人がいる一方で、ギリシア時代に、その文化圏に生きてきた、ギリシア系のユダヤ人がいるということを思い出さないといけません。ダニエル 8 章で預言されていた、ギリシアの王によるユダヤ人に対する大迫害で、マカバイ家の者たちが勇猛に戦ったのがマカバイ記にあります。その辺りからユダヤ人もギリシア化されていった人々が多くいました。ですから、エルサレムと周囲のユダヤ地方にいる、伝統的なヘブル的ユダヤ人と、そうではない遠くに住むギリシア系ユダヤ人がいるのです。そのギリシア系ユダヤ人、ヘレニストのユダヤ人と呼んでもよいでしょう、彼らはエルサレムにもやってきて、ユダヤ教を学んでいたということです。

その七人のうち、御霊と知恵に満たされていたのがステパノでした。彼が論じたのは、これらギリシア系のユダヤ人です。「6:9-10 ところが、リベルテンと呼ばれる会堂に属する人々、クレネ人、アレクサンドリア人、またキリキアやアジアから来た人々が立ち上がって、ステパノと議論した。10 しかし、彼が語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかった。」クレネとアレクサンドリアは、北アフリカ。そしてキリキアやアジアは、今のトルコです。サウル、つまりパウロは、このキリキア州のタルソ出身のユダヤ人です。サウルによって、ステパノは自分の文化、言語、学問の領域に入ってきた人間であります。

そして、彼らがステパノを、サンヘドリンに引きずり出してきたのです。そしてその内容は、「こいつは、聖なる所、神殿を壊すと言っている。モーセの律法や慣習に反することを教えている。」というものでした。これは、神殿を管理するサドカイ派にとって脅威ですが、パリサイ派にとっても脅威です。パリサイ派は、モーセの律法に対して極めて厳格であり、その他の預言書もすべて信じており、そして口伝律法と呼ばれる、律法の解釈についても遵守していました。それで、イエスご自身と論争したのです。そして、先祖たちを敬い、ユダヤ人であること、イスラエルの子孫であることに誇りを持っていました。

ですから、ステパノが説教したことは、自分たちの深く信じていることに触れたのです。しかも、反論の余地のないぐらい、ステパノの語ったことは知恵に満ちていました。それで彼らが発狂して、石打ちにしたのです。イエス様は、ローマ当局に引き渡され、十字架刑に処せられましたが、そこには、聖書の預言がありました。詩篇 22 篇には、十字架刑でなければあり得ない描写が、預言されています。ユダヤ人たちは、ローマによって死刑を執行する権利が剥奪されていましたが、純粹の宗教についてのことは、こうやって、ローマ当局をやり過ぎて石打刑は実行していたのです。

その時に、石投げをする上着の番をしていたのがサウルです。「7:58 そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけた。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた。」これは、サウルが積極的に、ステパノの死に賛同していたことを示すものです。

このようにして、新たな迫害の波が始まったのです。これまではサドカイ派が主導していましたが、今は、ギリシア系のユダヤ人が主導し、その中にパリサイ派もいるということです。パウロは後に、エルサレムで騒動が起こった時に、ユダヤ人たちに、「22:20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私自身もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの上着の番をしていたのです。」と証言しています。

サウルは、かつて、ガマリエルの下で学びました。後にこう証言しています。「22:3 私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」ガマリエル自身は、放っておきなさいという判断でありましたが、サウルは、この熱心さから師匠を出し抜きました。

2A エルサレムへの激しい迫害 1b

^{1b} その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外はみな、ユダヤとサマリアの諸地方に散らされた。

サウルが先頭に立つ、この激しい弾圧が始まりました。使徒たちは、エルサレムの教会を守らなければいけないという立場から、エルサレムに留まりました。また、かつてサンヘドリンで、手を下

さないという判断を一度下しているの、一定程度、守られていた可能性があります。けれども、人が集まれば目立ちますから、彼らはそこで集まることができないので、周囲に散らされました。

もしこれだけしか見なければ、「ああ、せつかく主のお働きがあったのに、これで妨げられた。ステパノは、あんなに、はっきりと言わなくてよかったんじゃないの？」なんて思う人も、いるかもしれませんが。事実、キリスト教会の中では、だれかが主の証しを立てて、それで不都合なことが起こると、「いわんこっちゃない。もっと黙っていれば、賢く動けば、こんなこと起こらなかったのに。」として、主の証しや、主のために動くことを否定的に捉える声が聞こえてきます。

迫害や弾圧が起こることは、非常に悲しいことです。けれども、主は、この悪をも用いて、ご自分の計画を実現させていかれる方です。「ユダヤとサマリアの諸地方」とあります。そう、これは先に話したように、イエス様が弟子たちに、エルサレムを始め、ユダヤとサマリアに対して、わたしの証人となると約束されたところなのです。彼ら自身は、迫害から逃れることは、不本意なことです。迫害が起こらなければ、どれほど良かったことでしょうか。けれども、実は逃げているということが、福音を、主が言われたように、ユダヤとサマリアの諸地方に伝えるきっかけになったのです。

私たちは、いつの間にか、世にある哲学に影響されています。それは、「うまく行かなければ、それは神のみこころではない。うまく行くから、それはみこころだ。」というものです。これは、全く違いますね。世の教えです。うまく行かないこと、否定的なこと、悲しいこと、そういったものすべて含めて、その欠けを用いて、主はご自分のみこころを行われるのです。例えば、ヨセフが兄によってエジプトに売られたこと。これは、神がそう仕向けているのではありません。悪です。しかし、その悪を用いて、主はヤコブの家族を救う計画を立てておられました。ここでは、迫害という悪を用いて、主は福音を、ユダヤとサマリアの地方に伝える計画を持っておられたのです。

そして、主は時に、私たちの快適さを壊されます。私たちはもちろん、安定して、快適であることを好みます。エルサレムの人々は、その中で美しい交わりと、みことばを聞いていて、満足していました。けれども、満足をしていると、それは良いことであったとしても、時にみこころを見失ってしまうことがあります。そこで、主は揺るがすのです。それは、私たちにとって痛いことです。しかし、それで陶器師である主は、私たちをみこころのとおりにお直ししてください。

3A ステパノの死の悼み悲しみ 2

² 敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のためにたいへん悲しんだ。

ステパノ自身が敬虔な人でした。御霊と知恵に満ち、評判の良い人でした。そして、恵みと力を持ち、不思議とするしも行っていました。サンヘドリンの前に立った時に、御使いの顔のように見えました。そして石打ちにされる時、イエスの御名を叫び、「私の霊を受けてください」と言い、また、

「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」と叫んだのです。どれだけ、主を恐れかしこんでいる事でしょうか！ですから、敬虔な人たちはステパノを葬ったのです。ちょうど、主ご自身が死なれた時に、アリマタヤのヨセフやニコデモがやってきて、丁寧に葬ったのと似ています。

そして、ステパノのために、たいへん悲しんでいます。当然です、だれもが悲しいです。しかし、先ほど言いましたように、その悲しみを通して、主はご自分の計画を実行されていました。この殉教によって、多くの実が結ばれようとしています。主ご自身が言われました。「ヨハ 12:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」

それから、もしかしたら、この敬虔な人たちは、「主が戻ってこられるまでに、ステパノは生き延びなかった」という悲しみもあったかもしれません。ペテロも使徒たちも、主がもう間もなく来られると説教していました。主が来られる時に、すべてのものが建て直されます。ところが、その前に死んでしまいました。それで主が来られる恵みにあずかることができないとして、悲しんでいたという可能性もあります。なぜなら、テサロニケ人への手紙第一で、そうやって悲しんでいる人々がいたので、主が来られる時は、まずキリストにある死者がよみがえり、そして生き残っている私たちが引き上げられるという希望を、4章でパウロは信者たちに語ったのです。

4A 熱心さによる迫害 3

³ サウロは家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出して、牢に入れた。

どうして、ここまでもサウロは暴力的になったのでしょうか。まず、彼が回心するまでが、自分が迫害者であったことを、何度となく、人々の前や裁判を受けている時にも証言しています。エルサレムに集まっているユダヤ人たちに対して、こう言いました。「22:4 そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。」牢に入れただけでなく、死にまでも至らせています。ステパノの死に賛成のように、他に人たちにもそうしたのでしょう。主の弟子たちを、むちで打ち叩いていてもいます(22:19)。御名を汚すことも言わせています(26:11)。

なぜ、こんなことまでしたのか？教会への手紙で、その理由を話しています。「ピリ3:5-6 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、6 その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。」一つに、イスラエル人であることを誇っていました。また、先祖を誇っていました。

そして熱心であったことがわかります。律法について熱心で、その熱心さから迫害したのです。おそらくパウロは、偽預言者がイスラエルの間にいたら取り除きなさいという、モーセの律法の命

令に従っていたのだらうと思われます。自分たちの信じていることが、その根本が、彼らの新しい教えでくつがえされるという危機感を抱いていたのでしよう。

しかし、律法の行いついて熱心だったということは、それが神の義ではなく、自分の義を立てるようになっていたからそうなのだとうパウロ自身が、ロマ 10 章で話しています。「10:2-3 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。」自分自身の義であり、それは真つ向から神の義に違反します。神はご自分の義を示したいと願われて、神を信じることを求めておられました。そして恵みが現れ、神の義が示されるのです。

なので、信仰の義について無知だったので、熱心なだけで知識がなかったので、神の義に達成できませんでした。むしろ、イエスの弟子たち、究極的にはイエスに反対し、迫害する者となりました。主ご自身が、そういう者たちが出てくることを予告しておられました。「ヨハ 16:2-3 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。3 彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。」

パウロは、このことに気づき、今、赦された罪人であることを告白しているところがあります。テモテ第一 1 章です。「I テモ 1:13-15 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。14 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」知らなかったので、これだけのことができたのです。そして今は、自分は罪のかしらとまで告白しています。

主は、この道の迫害者を、この道を伝える福音宣教の第一人者としました。この驚くべき恵み、あまりにも深い寛容は、私たちの思いを超えてしまいます。パウロ自身、自分は使徒たちの中で最も小さな者で、使徒と呼ばれるに値しないと告白しています（I コリ 15:9）。でも、神の恵みによって、今の自分になったとも言っています。そして、なぜ神がこんな恵みを示すのかというと、それは、この後でイエスを信じる人々が、神がこの上のない憐れみを示す方なのだとう前例を示すためなのだとう、パウロは話しています。「I テモ 1:16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」

恵みというのは、すべてに勝利しますね。どんな悪も、主はご自分の計画の中でご自分の目的のために用いられます。死からの復活のわざを行われます。最悪の時に最善をもたらします。主の十字架がまさにそれです。そして、勝利から勝利へと、罪や闇を葬り去りながら、支配していか

れるのです。「ロマ 5:20-21 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わる場所に、恵みも満ちあふれました。21 それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。」

次回は、ピリピによるサマリアへの宣教を見ていきます。